
幻夢島

杉並健二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻夢島

【Nコード】

N4383I

【作者名】

杉並健二

【あらすじ】

大学卒業の思い出として、観光へ行くことになった主人公。だが、目的の島へ向かう途中で嵐に襲われる。やつのことで島へ辿り着いたのだが、みんなとはぐれてしまった。おまけにその島は人気がなく不気味で様子がおかしい。

本当にここは観光地なのだろうか？そこで主人公は不可解な頭痛に襲われる。

「いったいこの島で何が起きたんだ？」

主人公は島を探しまわるのだが……

前編（前書き）

初めての投稿になります。

前編と後編の二つに分かれた小説です。

どうぞお楽しみください。

前編

午後三時三十分、船は荒波によって揺れていた。昼ごろまでは明るかった空が、午後になるにつれてだんだんと暗くなり、ついには嵐がやってきた。船内では皆固まってじっとしている。やっぱり来るんじゃないかった。まあ、しかたがないが……姉さん、今ごろどうしてるかな。なんだか昨日までが懐かしく感じる。

二日前。

「おい、杉並。ちよつといいか？」

大学の昼休み。廊下で声をかけられた。

「なんだ？山梨」

「ちよつとな」

「いったいどんな話だったんだ？まあ、こいつのことだ。またくだらん話だろう。」

「いいから聞けって」

山梨が話し始める。

「大学最後の思い出を作らんか？夏休みに」

「は？」

何を言ってるんだ？

「だから、何か大学最後にやらないかと言うことだ。あしたから休みになるだろ？」

たしかに俺たちは大学四年。今年で卒業だ。それに夏休みに入る。だけどなあゝ

「何かやるって、具体的には？」

「そうだな。まあ、島に観光というのはどうだ？」

「島？」

「そうだ。島といってもただの……」

「まて！」

「ん？」

山梨のことだ。何か伝説とか神話とかがある所に決まってる。彼は小型船の免許を持っていて、そういう所に行つては何かと調べたがるのだ。

「その島っていうのは、普通の観光地なんだろうなあ？」

「ん？普通？というത്？」

「たとえば、八丈島とかあるだろ？」

俺の普通はそんな感じだが、山梨の普通は普通じゃない。

「まあ、そんなようなとこだな」

本当だろうか？やはり気になる。

「具体的には？」

「ん？ああ、その島には古くからの言われがあつてな。夢、まあ、人が寝たりしてみる夢だな。その夢の変わった伝説があるんだ。な」と、夢の……」

「もういい」

山梨の説明を途切れさせる。話が何分続くかわからないからな。

「何だ？これからがいい所なのに」

「もうわかったから」

「そうか？じゃあ……」

「行かない」

そっけなく答える。

「何でだ？」

「面倒」

「そうか。残念だ。まあ、出発は明後日だ。それまで考えてくれ」

「まあ、適当に考えとくよ」

「あ、そうそう。後、島の名前だが……」

その島の名前も聞きもしないで、さっさとその場を去った。俺は普通でいいんだ。そう思って次の講義の教室へ向かった。

その日の放課後。講義も終わり、帰ろうとしてる時。

「おゝい、健二いゝ」

「またもや声をかけられる。」

「なんだよ、義之」

「一緒に帰ろうぜ。飯、奢ってやるから」

「え、まあ、いいけど。どっいう風の吹き回しだ？」

「義之が急に奢ってくれるなんて、何かありそうだな。まあ、いいか。」

「別に何もねえよ」

「何も無いって言ったな、それじゃあ奢ってもらうかな」

「へゝい、了解」

「何だか怪しいが、ついて行くことにした。せつかく奢ってもらうのだから、これを逃すチャンはない。」

「近くの飲食店に入る。」

「まあ、何でも頼んでくれ」

「ん？ああ」

「何か高いものにしてやろう。金はけっこう持っているらしい。」

「あのさ……」

「ん？」

「ちょうど注文したハンバーグラunchを食べている時、義之が話し出した。」

「明後日、暇か？」

「なんだ急に」

「まあ、聞けって」

「ゝたく」

「義之が話し始める。」

「いやあゝ食った、食った」

店の外に出た。義之がまさかホントに奢るなんてなあゝ

「どうも、ごっそうさん」

「それよりもたのんだぞ？」

そう言って義之が俺の肩に手を置く。

「分かってるって、まあ、考えるよ」

「って、おい、考えるんじゃないくて、決めてくれ！」

「わかったわかった」

適当に答える俺。

「くそ、しかたない。今日の夜には絶対に……」

「え？夜がどうしたって？」

「いや、なんでもない」

なんだよ？変な奴だな。まあ、いいか。

「とにかく頼んだぞ」

義之は俺にそう言って帰っていった。

その後、我が家に到着。

「ただいま」

「おかえり」

「あれ？姉さん」

出迎えたのは、姉だった。杉並柚希。俺の三つ年上で、今は学校の先生をしている。俺は大学に行くにあたって、引越してきた。けどまさか、俺の大学の付属高校に姉さんが新人教師として入ってくるなんて思いもなかった。まさに偶然というものだ。そんな出来事があったから姉さんは同じアパートに住んでいる。男女が二人屋根の下、いつ間違いが起こっても……って、姉と弟の関係だからそれは絶対ない。それはそうと今日は会議がどうのこうので遅くなるって言ってたはずだけど。

「会議じゃなかったの？」

「ん、サボって来ちゃった！」

「え……？」

いいのかそれ？

「つて嘘よ、うそ。予定より早く終わったの」

「嘘ねえ……はいはい」

ため息を付く。つたく、いつまでも子ども扱いして、第一俺はもう大学三年だぞ。

まあ、充分子供っぽいところはあるけど……

「そういえば、健二」

姉さんが出してくれたお茶を飲みながら、話していた。

「え？何？」

「明日、予定ある？」

「明日？」

「うん、そう」

「そうだなあ」

夏休みの初日か……予定と言えば、山梨が……って、それじゃない。まったく、まさか義之までが……。店で義之と話していたことそれは山梨と同じ。島に行かないかということだった。義之まで山梨の味方か。別に山梨が悪い奴ってわけじゃあないけど、やっぱりそういうのはちょっとな。なんとなくそう言う気分じゃない。それよりもゆっくりと過ごしたいのは本音だ。せつかくの夏休みなんだし。

山梨が言うには何日か泊まりになるらしい。

「で、どうなの？」

姉さんがもう一度聞いてきた。

「大丈夫だけど、どこか行くの？」

そう答える。

「ちよつと買物にね。私も休みだから付き合ってくれる？」

「ああ、いいよ」

姉さんと買物か。久しぶりだな。しばらくは穏やかな日々が続

きそうだ。

翌朝。目が覚めた。今日は土曜日。夏休み初日。朝はゆっくりとん……？

そういえば今日は姉さんと買い物に行く約束があつたつけ。時間を見ると八時四十五分。やばっ！急げ！約束は八時半。早く起きたのなら起こしてくれればいいのに。

つて、そういうところが子供なんだな俺は。そんなことを思いながらも大急ぎで支度を済せた。

部屋から出てリビングに行くと思っていたとおり姉さんが待っていた。

「おはよう、姉さん」

「健二、待つてたわよ」

「ごめん、ちよつと寝坊しちゃって」

「まあ、そんなことだろうと思ってたけど」

「ごめん」

そう言つと姉さんは俺を見つめた。

「な、何？」

「じゃあ、奢ってもらおうかなあ、健二くん」

「え？俺、金ないよ？」

「遅れたのは？」

「……」

「ふふつ、行くよ」

「はい……」

なんだか複雑な気分で、それでいて楽しみなような。そんな感じがした。

駅前のデパートにやって来た俺たち。家から徒歩十五分たらずの

ところにある。食料品や洋服、本屋、DVDショップなどよくある普通のデパートだ。今日みたいな土曜日の休みには大勢の客で賑わっていた。

「で、何買うの？」

「うん」

なにやら悩んでいる様子だ。

「もしかして買うもの決まってる？」

「えっと、そんなことはないわよ」

「？」

よく分かん。姉さんならしっかりと買うものを決めてきてるはずだけど……

「えっと、健二」

「ん？」

「うっん、やっぱりなんでもない」

ますますわからない。どうしたんだろう？

「あのさ……」

俺がそう聞こうとした時、姉さんが話を終わらせた。

「と、とりあえず行きましょうか」

そう言って歩き出す。まあ、いいか。

「で、結局何処行くの？」

デパートのエスカレーターで二階に向かっていた。

「まずは少し服を見たいから、付き合って」

ほう、服ね……って、ちょっと、引っ張らないでくれ。姉さんは俺に関わらず手を引っ張っていった。

「ちょ、ちょっと」

さすがに手を……。

「何？健二」

「これ、これ」

姉さんの手を指でさす。離してくれ。

「いいじゃない、姉と弟なんだから」

「い、いやその……」

そう言う意味ではなくて、ただ、恥ずかしいんですけど……。

「あ、あの、姉さん？」

「ねえ、これなんかどう？」

はあ、完全に買い物モードに入ってる。もう、いいか。俺たちは久しぶりの買い物を楽しんでいた。

気が付けば夕方。一日中デパートにいた。時間は早いものであつというまに過ぎ去ってしまう。

「今日はありがと、健二」

帰り道、姉さんの荷物持ちをしながら話していた。

「いや、いいって」

「本当？」

「ああ」

「でも、姉さん？今日はなんで俺と？」

そういえばふとそんなことを思った。別に俺でなくとも友達と一緒に……

「そんなこと決まってるじゃない」

「え？」

「ただ、楽しみたかったのよ。健二と二人で」

姉さんはそう言つて微笑む。

「そっか」

姉さんの期待に答えられて良かった。今日は本当に、そして久しぶりに楽しむ事ができたと思う。俺と二人で。

「なるほどね、要するに姉さんはブラコンなわけだ」

「え？ちよ、ちよっと、何言ってるの？」

「冗談[冗談]」

「まったく、もう」

いつかのお返しだ。でも。

「姉さん、ありがとな」

正直な気持ちを伝えた。

「も、もう。は、はやく帰ろ！」

姉さんはまたもや俺の手を引いて家まで帰った。

その夜、風呂から上がって自分の部屋にいた。山梨たちが島へ行くのは明日だったな。その時、机の上の携帯が鳴った。

「はい、もしもし？」

「あ、良かった。あの私、綾乃だけど」

「あ、綾乃？」

電話は綾乃からだった。三瀬綾乃。同じサークルの仲間で一年の時に会ってからよく一緒にいることが多い。

「うん、えっと今何してた？」

「今？風呂から上がって、パンツのみになってるけど……」

「そ、そういうことじゃなくてえ」

綾乃は慌てているようだった。それはそうか。

「はは、ごめんごめん。で、何？」

「えっと、山梨君から聞いたんだけど、明日から島に行くことで、一緒に行かないかって」

「は、はは……。山梨の奴はここまでして俺を行かせたいのか。」

「私や沙耶ちゃんも行くんだけど、一緒にどうかな？」

「え？綾乃と沙耶も行くのか？」

「うん、だから一緒にどうかな」

「うん、綾乃と沙耶も行くのか……。沙耶は義之の妹で二年生の後輩でだ。彼女とも仲が良い。義之と一緒に三人で遊んだ事もあった。」

「……」

少しの間考える。俺がもし山梨達と一緒に行ったら姉さんは……。

「す、杉並君？」

「あ、ごめん」

『それで……』

「綾乃、ちよつと考えさせてくれ」

『え？あ、うん。いいよ？』

「じゃあ、また後で連絡するよ」

『はい、三瀬綾乃、了解しました』

「おう、じゃ、また後で」

『うん』

携帯を切った。さて、どうしたものか。みんなが誘ってくれてい
る。始めは面倒だと思ってたけど、さすがに綾乃にも誘われて面倒
だからなんて言えないし、沙耶も一緒に行くことだしなあ。

トントン

ドアをノックする音。

「はい？」

姉さんがドアを開けて入ってきた。いつの間に？居たんだったら
入れば良かったのに。

「健二、ごめん」

「姉さん……」

「明日、どこに行くの？」

「うん、姉さんにも話そうと思ってたんだけど、山梨から誘われて
しばらく島に旅行に行こうと思うんだ。始めは面倒なんて思ってた
けど、綾乃や沙耶も一緒に行こうって行ってくれたし、義之もね。
だから……」

「へー、そうなんだ。いいなあー、なんだか楽しみね」

「いや、だから……」

「え？」

「俺が旅行に行っちゃったら、姉さんは一人になるんだぞ？」

「うん、わかってる」

「だから……」

「もしかして、私の心配してくれてる？」

「え？あ、いや」

そつだ。と言いたかったのだが、言葉に出なかった。そりゃ、心配だよ。兄弟だから。

「ありがと、健二。でもせつかくの夏休みじゃない、楽しんできなさいよ」

「そうだけど……」

やっぱりなあ、一人にするのは心配だ。

「ふふっ、やっぱり健二はシスコンね」

「え？ど、どういうことだよ」

「だって、私が一人だと心配でしょ？」

そう言って笑う。

「そりゃ、まあ」

シスコンか……さっきのブラコンのお返しだな。姉さんもなかなかやるなあ

「でも、本当に大丈夫だから。友達も一緒なんですよ？」

「まあね」

「じゃあ、行かなきゃ。ホントは行きたい。違うかな？」

「あ、ああ。行きたい、かな。」

やっぱり行きたかった。面倒とか思ってたけど、今は行きたいと思う。せつかく誘ってくれたのだから、やっぱり大学最後の思い出を作らなくては。

綾乃に行くことに決めたことを連絡して、明日の支度をする。朝十一時に港に集合とのことだ。姉さんが港まで送って行ってくれることになった。明日からいよいよ大学最後の夏休み、山梨企画の島へ旅行が始まる。そういえばこの島に行くんだ？山梨に聞いとけば良かったな……ま、でも楽しめればどこでもいいか。その後、俺は支度も終わりに眠りに付いた。

当日の朝。窓を見ると晴れ渡っている。絶好の旅行日和だった。着替えを済ませてリビングへ。

「あ、おはよう」

「おはよう、姉さん」

いつものように朝食を作ってくれていた姉。

「ご飯、出来てるわよ」

「お、ありがとう」

座って食べ始める。

「いよいよだね」

「ああ、でもやっぱり心配だなあ」

「ありがとシスコンさん」

「シスコンって言っな！」

「わかってまゝす」

本当に大丈夫だろうか？やはり気になってしまっ。

十時四十五分、姉さんの車に乗って出かけた。

十五分ほどして港に到着した。車から降りる。

「それじゃあ、気を付けてね」

「分かってる。姉さんこそ」

「私は大丈夫。楽しんでらっしゃい」

「ありがとう」

姉さんが帰った後、皆を探す。

「おゝ杉並。よく来てくれた」

山梨が俺の肩に手をかけて言った。

「おっす、健二」

義之はあいかわらず。

「ああ」

「おはようございます、先輩」

「沙耶、おはよう」

山梨、義之、沙耶、後は……。綾乃の到着を待つ。

数分後……

「ごめんね。待った？」

綾乃が荷物を抱えて走ってきた。

「いや、大丈夫」

「よし、じゃあそろそろ行こう」

山梨が言った。

「おう」

俺は綾乃の荷物を持ってやり、船に乗り込んだ。せっかくだ、思いつきり楽しもう……。

そして現在に至るのだが、まったくもってひどい嵐だ。楽しむどころではなくなっていた。船室の窓から外を眺めてみる。波が時折船に覆い被さり、今にもひっくり返りそうだ。

「おい、本当に大丈夫か？」

操縦している山梨に声をかける。

「なあに、心配するな。すぐにおさまる」

山梨はそんなことを言っているが、どうみてもおさまる気配はなく、むしろひどくなっているような……。船が壊れなければいいが。

「おい、しっかりしろ義之」

今にも一発吐きそうな義之を見た。まあ、それもわかる。こんなに揺れてचना。

「ねえ、杉並くん。すごい嵐だね」

綾乃がそばに寄り添って話し掛けてきた。

「そうだな。早く着くといいんだが」

そう答えた。ふと横を見ると、沙耶もダウンしていた。

「沙耶ちゃん。大丈夫？」

綾乃が声をかけたが、うんと呟いて、またぐったりとしてしまった。

「おい、山梨。いったいあとどれくらいで着くんだ」

山梨に話し掛けた時、彼は双眼鏡を覗いて、前方を見ていた。

「ちよつとまで、もしかしてあれが……」

山梨が地図を開いて確かめる。

「やつぱり。おい、みんな見えたぞ」

操舵室から山梨が叫んだ。それを確かめるために、揺れる船内でなんとか立ち上がり、操舵室へ行く。双眼鏡を受け取った俺は覗いて見た。はつきりとは見えないが、たしかに島が前方にあった。暗くて周りが良く見えないにも関わらず、その島だけが浮かび上がっている……

「島が見えたの？」

船室に戻ると、綾乃が聞いてきた。

「ああ。無事に着けるといいんだけどな」

「……」

綾乃が心配そうにしている。

「と、とにかく早くついてくれえ」

義之が死にそうな声を出した。

「兄さん、大丈夫？」

沙耶も兄さんが心配らしい。自分もたいへんなのに。

「沙耶も大丈夫か？」

沙耶に言った。

「た、たぶん」

沙耶は大きく深呼吸する。

「早くついてくれえ」

こっちはまだダウンか。義之も災難だな。

「杉並くん、このままどうなっちゃうんだろう……」

綾乃が突然そんなことを言った。

「大丈夫だよ。きつと」

「そ、そうだよね」

大勢のほう良かった。こんな状況でも話してくれる人がいる。その時だ。突然、船が大きく揺れた。

「みんなどこかにつかまれ！」

反射的に手すりにつかまる。

「おい、みんな……」

そう言おうとしたとき、またもや大きく揺れた。

「たいへんだ！船が座礁したみたいだ！水が！」

操舵室から山梨が叫んでいる。

「船が沈む前に脱出するぞ！」

みんなに向かつて叫ぶ。皆、救命胴衣を付けて置いて正解だった。

いつせいに海の中へ飛び込んだ。最後に義之がふらつとしながら飛び込んだ。いや、落ちたのか！？

「義之！」

義之を助けに行こうとしたその時、激しい頭痛に襲われた。

「な、なんだ？」

頭が締め付けられるような、苦しくて激しい痛み。まるで、助けるな！とでも言っているかのように……

「杉並く〜ん！」

綾乃が叫んでいる？俺の頭は痛みには耐え切れず、意識を失ってゆく。くそ！こんなところでくたばってたまるか！なんとか意識を保とうとしたが、だめだった。遠くで綾乃が俺の名前を叫び続けているような気がした。

「う、うう」

俺は目を覚まし、起き上がる。そこは砂浜だった。暗く、波の音と風の音が重なって聞こえる。

「おーい！どこだー！」

砂浜に向かって叫んだ。どうやらみんなバラバラになってしまったらしい。くそ！誰も、誰も助けられなかった。でもあいつらもどこかにいてほしい。みんなが生きてることを信じたい。

しばらくの間その場に立っていたが、みんなを探すことにした。

絶対この島のどこかにいるはずだ。そう思いながら歩き出す。砂浜には何も無い。人も誰一人いないし、手がかりになるものもなかった。ふと、先を見てみると明かりが点いていた。何の明かりかは遠くで見えないが、光っているものがあることはたしかだ。その明かりを指してあるくことにした。船のメンバーでは無いにしろそこに誰かしらいるはずだ。

砂浜から階段を上り、上の街道沿いに歩いた。砂浜と同じく風が容赦なく吹き付ける。身屈めながら明かりに向かって歩く。少し歩いていくとその明かりが街灯だということがわかった。そしてここは港らしい。小型の漁船がいくつか止まっている。

「誰かいませんか？」

暗い港に向かって呼んでみる。返事は返ってこない。街灯の明かりだけが不気味に光っていた。まるで何かを呼んでいるように。とりあえず進むことにした。街道を進んで行くと横に細い道があった。街道は少し広がったのだが、そこに入ってしまうと、道は舗装されておらず、木が周りを囲んでいてより暗かった。足元に注意を払いながら、進んでいく。海に投げ出されてからかなり時間が経っていると思うが時計が無いので時間がわからない。さらに先に進んでいく。

すると、ある程度広い場所に出た。周りを木に囲まれており、その端に倉庫のような建物がある。その先には階段が続き、この先も行けそうだった。先へ進むのは倉庫のなかを調べてからでもいいな。わずかな期待だが、誰かが隠れているかも。ひょっとしたらと倉庫の錆付いた扉を開け、中に入ってみる。すると……

「誰？」

ふいに声がした。やはり誰がいるのか？

「誰かいるのか？」

聞き返す。そして声の主がわかった。綾乃だ。

「綾乃！」

俺は思わず叫んでしまった。やっと逢えた。

「杉並くん！」

綾乃も叫んでいた。

「助かったのか？他のみんなは？」

綾乃にたずねる。

「う、うん。私も何が起こったかわからない。気を失って、目が覚めたら砂浜にいて、港にたど

りついたの。明かりがあったから。でも誰もいなくて。島に入ってみたらここを見つけて」

綾乃が説明した。

「そうだったのか。でも、絶対にあいつらを探し出して帰ろう。あいつらも俺らを探していると思うし」

俺は綾乃を励ました。綾乃はかすかに笑った。それを見て、俺もかすかに希望が湧いてきた。

「これからどうするか？」

綾乃に聞いてみた。綾乃もどうしようかと悩んでいると思うが……

「どうしよう。むやみに動き回って私たちまではぐれたら」

というか、もうはぐれてるんじゃないか。みんなと。

「まあ、そうだな。だが、ここにいても何も始まらない」

俺も不安だった。こんな状況じゃあしょうがない。

「この辺を探してくるよ」

綾乃に言った。綾乃も行こうとしたが、もし何か危険な目にあったら大変だ。俺は彼女をこの場所にいるように言った。

「何かあったら携帯に……」

ポケットの中を探ってみた。だが……

「つて、そうか、海の中だ」

たえ持つていたとしても使えないだろう。

「うん。だから誰とも連絡できなくて」

まいったな。どうするか？

「やっぱり綾乃には待つてもらう。俺が帰ってくるまで絶対に外に出ないようにな」

「うん。わかった」

綾乃は素直に聞いてくれた。やはり探しに行こう。綾乃がここにいるのなら、近くに誰がいるかも。それがあいつらなのか？この島の住民なのか？そっぴやさつきから人を見てないような気がする。いくら夕方でも港くらい人がいてもいいじゃないか？それなのにとこも死んだように暗いなんて。いったいどういうことだ？そう思いながら外に出る。嵐はとおりすぎたようだが、雨はまだ降っていた。「それじゃあ、行ってくる。すぐ戻ってくるからな」

「気を付けてね」

急いで外に出る。外に出たとたん雨が強くなったような気がした。港に行つて見よう。なぜかはわからんが。無駄だとは思うが、もう一度だけ。俺は雨の中、暗い小道を歩き始めた。

港に戻つて見たもののやはり誰かがいる気配はなかった。あきらめて綾乃のもとに帰ろうとした時、何かが動いた。船の影に隠れていてはつきりとは見えないが。

「だ、誰か……」

ゆつくりと近寄ると、なんと沙耶だった。足を押さえていた。

「沙耶！大丈夫か？」

沙耶に手を貸す。

「あ、はい、ありがとうございます」

沙耶が答える。

「とにかく逢えて良かった。他のみんなは……」
いない。綾乃と同じく一人だった。

「なんとか島に着いたんですけど周りに誰もいなくて。そして港のほうに明かりがあったので。行こうとしたら、急に風が……私、転んじゃって」

沙耶は足を捻ったようだ。

「そうか。でも見つけて良かった。探して見るもんだな」

「え、どうして」

「綾乃を見つけた。少し歩けるか？」

小道を指差す。

「え、綾乃さんも」

「そうだ。まだ綾乃しか逢ってないがな」

沙耶が立とうとしたが、よろけてしまった。

「あの、すみません」

「いや、いいって。ほら、つかまりな」

背中に乗るように言った。

「で、でも」

「先輩が後輩を助けるのはあたりまえだろ？」

「はい」

沙耶は素直に頷き、俺の背中に乗る。と、沙耶の足に手が触れた瞬間、頭痛がした。さっきの頭痛と同じだ。今度のは少しすると治まったが、沙耶の足の方が心配だ。急がなければ。早く応急処置くらいはしたい。

「先輩？大丈夫ですか？」

「え、ああ。ちよつと疲れただけだから」

俺たち二人は歩き出す。後は男二人か。あいつら大丈夫かな。途中、沙耶がぎゅっとしがみついてきて、俺は一瞬とまどった。

「ありがとうございます。先輩」

「え？ああ」

彼女を背中に担ぎ、そのまま歩いた。暗い小道を通り過ぎ、綾乃の待つ倉庫へ。

「ここですか？」

沙耶が背中と言った。

「そうだ」

ドアを開ける。

「綾乃？」

まっさきに声をかけた。綾乃は俯いていた顔を上げる。

「あ、杉並くん。と、沙耶ちゃん！」

背中の中の沙耶を綾乃の傍へ下ろした。

「沙耶が怪我してるんだ。何か持ってないか」

綾乃に聞いた。だが、綾乃は首を振る。」

「そうか」

どうするかな。このまま怪我をほっておくわけにもいかない。

「何か探してくるにしてもあれだしな」

「わ、私は大丈夫です」

沙耶が足を押さえながら言った。かなり痛そうだ。

「どうみても大丈夫じゃ無いと思うが」

「でも、どうしよう」

綾乃も悩んでいる様子だった。

「よし、それじゃ雨が小降りになったら、村に行つて見よう」

村がこの島にはあるはず。

「でも、村がどこにあるかなんてわかるの？杉並くん」

「あ、そうか。でもとりあえず奥に進めば何かあるかも」

あの階段を思い出した。今の沙耶には少し大変かもしれないが、ここでじつとしてても何も始まらないのだ。

「杉並くん。何でも行き当たりばったりね」

綾乃はくすつと笑った。

「たしかに先輩はそうですね」

沙耶も綾乃に同意して笑った。

「う、うるさいなあ」

そう言いながらも、沙耶と綾乃の元気が出てきたことに安心した。

それから少したつて外に出てみた。雨がやっと上がったのだが、外は闇に包まれていた。さっきよりももっと深い闇に。夜という。

「ねえ、どう？ 杉並くん」

綾乃がドアの前で言った。

「うーん。外は真っ暗だ」

「本当。どうするの」

「そうだなあ。今日はここで過ごすか？」

「だね。真っ暗だもんね」

俺たちは中に入った。

「沙耶。もう少しだけ我慢できるか」

「え、まあ、今は大丈夫ですけど」

「そうか。今日はもう暗いから、明日行つて見ようと思うんだが」
外を指差す。

「そうですね」

良かった。沙耶もわかつてくれた。もう少しだけ我慢してもらおう。俺は沙耶の隣に座った。その俺の横に綾乃が座る。え、この位置は……いやあ、何だか照れくさい。友達とはいえ、二人の女の子に囲まれて夜を過ごすなんてなあ

「あ、今杉並くん、変なこと考えなかった？」

綾乃に詰め寄られる。

「え、いやあ。そんなこと無いぞ」

そう言いつつも、心臓はどきどきしていた。

「先輩はうそがつけない性格ですもんねえ」

反対側では沙耶が綾乃の味方をしていた。

「な、ち、ちち違うー！」

二人の間で喚いていた。

「あ、ムキになるところがあやしい」

綾乃が言った。じつと綾乃と沙耶に見つめられ、ますます焦った。

「と、とにかく早く寝ようぜ」

やっとのことで、話をそらした。

「そうだね。明日のために」

綾乃がくすつと笑いながら言うと、沙耶も笑った。とにかく明日はがんばらないと。なんとしてもあと二人、あいつらも探し出して島から出よう！俺は心にそう決めた。

「おやす……」

二人に言おうとしたが、先に寝ていた。ま、いいか。その夜、二人が肩に寄りかかってきたせいで俺は寝ようにも寝れなかった。

「ふ、ふあゝ」

大きなあくびをして、目を覚ます。

「あ、杉並くん。おはよう」

綾乃は先に起きて、外を眺めていた。

「あ、ああ、おはよう」

俺も外を眺める。

「よく眠れた？」

綾乃が聞いてきた。

「え、まあな」

嘘だ。でも、綾乃と沙耶のせいで寝れなかったとは、とても言えない。沙耶はまだ壁に寄りかかって寝ている。

「沙耶、起きろ」

俺は沙耶を起こしに行く。

「ふあああ」

大きなあくびをして、沙耶が起きた。まだ眠そうだ。

「あ、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「なんだか、昨日はよく眠れました」

「そ、そうか。よかったな」

うゝん。どう答えていいのやら。それは俺のおかげかもなんて言えないし。

「で、どうするの？」

綾乃が聞く。

「そうだな。とりあえず一息ついたら、あの階段を上って行こう」

「あの上に村があるかもしれない。でしょ？」

「まあな」

俺たち三人は外に出た。雨は降っていなかったが、曇っていて薄暗かった。

「怪我はどうだ？」

沙耶の様子を見る。

「うん。少し痛いけど、大丈夫です」

「そうか。良かった」

俺を先頭に綾乃と沙耶が続く。階段を登りきったその先は、俺の読みどおりに村があった。昭和三十年時代を思い浮かべるような古い家何軒も並んで、その脇のほうには、古びたアパートがある。そして何より人の気配が全くしない。この島は無人島なのか？いやそんなことはない。

「誰かいませんか？」

返事が返ってこない。しーんと静まりかえっている村は、曇り空に包まれ、なお不気味だった。

「ねえ、どうしちゃったの」

綾乃が不安そうに聞く。

「俺にもよくわからないんだ」

「でも絶対変ですよ」

沙耶も後にくつつきながら言った。

「どうするの？誰もいないよ」

綾乃がますます不安になる。

「うーん。そうだな、とにかくどこか入って見よう」

そう思っただけの民家に入ろうとして時、沙耶が叫んだ。

「あ、あそこ！見てください！」

俺たち二人が振り向く。

「どうしたんだ？」

「さつき、人影が……」

「誰かいたのか？」

「はい、たぶん」

沙耶が指差したのは、古びたアパートだった。

「何階だ？」

「たぶん、四階だと思います」

俺たち三人は、そのアパートに向かって歩いた。近くに寄って見るとますます不気味だった。五階建てのアパートが今、俺たちの前にはある。

「ねえ、ホントに入るの？」

「ああ、沙耶が誰かを見たらしい」

先頭を歩いた。かなり中も静かで、誰もいない様子だった。内心不安だったが、彼女たちを先頭を歩かせるわけには行かない。俺は男だ！しっかりしろ！そう思いながらも階段をあがり、四階に辿り着いた。

「この中か？」

ドアの前で足が止まる。

「は、はは、入るぞ」

「声、震えてるよ」

「大丈夫ですか？」

綾乃と沙耶に言われて、少しためらいがちだったが、ドアノブに手をかける。

ギィイという音とともに、すんなり扉が開いた。

「誰かいますか？」

玄関ごしに声を掛ける。

「誰もいないみたい」

「そうですね」

二人とともに、部屋に上がる。中央には丸いテーブルが置かれ、食べ残しの鍋料理があった。食べ残し？いや、まるで食べ掛けた。

しかし誰もいないとは。じゃあ沙耶が見たという人影は？いよいよ本当にあやしくなってきたぞ。いったいこの島はどうなってるんだ？と、不意にあの頭痛が襲ってきた。

「く、くそ！」

「杉並くん？」

「どうしたんです？」

綾乃と沙耶が声を掛けている。だが、今度の頭痛はいままでの頭痛よりもひどかった。俺はその場に倒れこむ。なんてこった。くそ！必死に起きようとしたがだめだった。

「綾乃、沙耶……」

言いかけたところで、意識が薄れた。

「おい、おい！」

誰かが叫ぶ声……でも誰だ？意識がだんだんと戻っていく。

「おい、しっかりしろ！」

はっと目を覚ました。そこには義之がいた。

「義之！」

「良かった。目が覚めたみたいだな。でもどうやってここまで？」

隣には山梨もいた。ん？でも何か様子がおかしい。

「こ、ここは？」

「え、ああ、ホテルだ」

よく見るとまわりの風景がさつきと違っていた。明るく、清潔感が溢れる畳の部屋には、テーブルや椅子が置かれており、お茶が湯気を立てている。いったいどうなってんだ？俺はあのアパートにいたはずだが……。

「あ、綾乃たちは？」

そういえば綾乃と沙耶がいないことに、気が付いた。

「ああ、それなんだが、今、警察が探してる。行方不明らしい。嵐

の日、俺たちは海に飛び込んだろ？それから俺と義之は警察に運良く見つけられたが、お前と、あの二人が行方不明で……」

「何だつて？」

そんなばかな、さっきまで俺と一緒にいたぞ？

「それで俺たちはこのホテルで待ってるようにって言われたのさ」

山梨が説明する。

「お前が生きてて良かった。でも、でもおお」

義之が叫ぶ。

「綾乃と沙耶が早く見つかることを祈ろう」

なんだか話がおかしいぞ？じゃあアレは夢で、こっちが現実？だとしたら綾乃と沙耶が行方不明？でも、反対にすると俺は夢を今、見ていることになる。で、義之と山梨が行方不明。いったいどっちなんだ？つ、つまり世界が二つあると？

「あのさ……」

「なんだ？」

山梨に聞いた。

「これって現実か？」

「え、どこか頭でも打ったか？大丈夫さ。二人はきつと見つかる」
はたしてそうなのか？俺はさっきから頭が混乱している。窓からの日差しがまぶしい。ただ、わかっているのは、むこう側とは何もかもが違っていることだ。とりあえずこのことは話さないほうがいいだろう。

「とりあえず、お前が見つかったことは俺から連絡しとくよ」

山梨はそう言って、携帯を取り出す。

「……俺、探してくる」

俺は決心した。向こう側では綾乃と沙耶は生きている。でも……

「え、綾乃と沙耶をか？」

「ああ」

「お、俺も行く！」

義之も言った。

「あ、おい！」

山梨が止めようとしたが、俺と義之は駆け足でホテルから出た。やはり外の様子も全然違う。

これが夢なのかはわからないが、でも探し出す。絶対に。

「お前さ、いったいどうやってここまで来たんだ？警察が捜してたんだぞ？」

「え、ああ。それが俺にもよくわからないんだ」

「そうか……でも、何で見つからないんだよぉ〜沙耶ぁ〜」

義之は沙耶のことしか頭がない。でも俺も今は二人のことしか頭にない。俺たちは港に向かった。港には警察が来ていた。

「あの、まだ見つからないんですか？」

警察官の一人に声を掛ける。

「ん？ああ、今我々が船を使って探してるんだが……そういう君は大丈夫かね」

「え、あ、はい」

「君の友人の話だと、自分でホテルにたどりついたそうじゃないか」

「あ、まあ」

実際はよくわからんのだがな。

「何より無事でよかった」

「はい、どうもお騒がせしました」

俺は警官に礼を言う。

「いや、でもそれより早くあとの二人を見つければな」

警官はそう言って、他の捜査員たちの元へ行った。

「はやく見つかるといいのだが、今の俺じゃあどうしようもない」

というかこれは本当に夢だろうか？何だか急に現実に思えてきた。

俺たちはホテルに戻る。

「お帰り」

山梨がそう言って、お茶を飲む。

「そんなことしてる場合か！二人とも行方不明なんだぞ！」

俺は叫んだ。

「ま、まで、そんなに慌てても俺たちにできるのはここで連絡を待つことだ」

その通りだった。

「しかし……」

山梨に言おうとした時、突然電話が鳴った。

「もしもし？」

俺はとっさに受話器をとる。

「あ、君か」

さっきの警官だった。

「どうしたんです？見つかったんですか？」

「……砂浜の横の岩地で見つけたことには見つかったんだが……一人がかなりの重症だ」

「なんですって？」

俺は慌てて聞き返す。

「とにかく君たちも早く病院に。場所は……あ、おい……」

慌てて電話を切り、飛び出そうとする。

「おい、まで」

山梨がそれを止めた。

「病院がどこにあるのかわかるのか？」

あ、そういえば聞く前に切ってしまった。山梨は地図を開いてこの近くの病院を探す。

「たぶんここだな。ホテルの前の大通りを真っ直ぐ行ったところに病院がある。港とは反対側だ」

「よし！行こう」

俺は真っ先に飛び出した。後から山梨と義之が続く。二十分ほど行くと、その病院に辿り着いた。ここにも真っ先に入り込む。

「あの、今運ばれて来た患者は？」

俺は受付で聞いた。

「二階の治療室に運ばれたと思いますが……あ、あの……」

俺は階段を駆け上がった。そこには沙耶が椅子に座っていた。

「沙耶！」

はっと沙耶が振り向く。

「先輩！」

「大丈夫だったか？」

「はい、私は軽症でしたが、綾乃さんがどこかを強く打ったらしくて」

「じゃあ、綾乃が……重症……」

と、その言葉を言いかけた瞬間、あの激しい頭痛に襲われた。な、こんなときに……俺は長椅子に倒れこむ。なんだってんだ？ いったい？

「あ、先輩！ しっかりしてください……」

沙耶の声を最後まで聞けずに、またもや気を失ってしまったようだ。

「う、うう」

俺は唸りながら起き上がる。そこはあのアパートだった。

「良かった。目が覚めたんですね」

「沙耶……」

どうやらあれは夢だったのか。やっと四人揃ったと思ったら、綾乃が……

「大丈夫でしたか？」

「あ、ああ」

そういえば綾乃がいないことに気が付いた。アパートの一室は以前と変わりなかったが、綾乃だけがいなかった。

「綾乃は？」

俺は沙耶に聞いた。

「それが……」

沙耶の話によると、俺が倒れた後、一人で、助けを呼びに行った

らしい。くそ！もつと早く気がつけば良かった。どうみたっておかしいこの島で、一人で行動するなんて危険すぎる。

「沙耶、綾乃を探しに行くぞ！」

「え、でもここに居てって綾乃さんが」

「俺はもう大丈夫だ」

「本当ですか？」

「ああ」

俺たちは扉を開けて、階段を下りた。外に出ると、霧が出ていた。山奥でも無いのに、変だな。やれやれ、最悪の天気だ。いったい綾乃はどこまで行ったんだ？俺たちはまず、この村の中から探すことにした。

「霧ですね」

「ああ、余計探しにくくなっちゃったな」

霧の中の村は驚くほど見えにくく、そして不気味だった。アパートの横にあったタバコ屋を通り過ぎようとしたとき、またもやあの頭痛に襲われた。

「う、」

俺は頭を抱える。

「大丈夫ですか？」

沙耶が横で心配そうに顔を覗き込んだ。

「ああ」

本当は大丈夫じゃあないのかもしれないが、沙耶に迷惑はかけたくなかった。霧の中では、全体の様子が見えない。俺たちは慎重に少しずつ探し回る。タバコ屋の向かい側にあった、古い食堂を通り過ぎ、その横の米屋も通り過ぎる。どこにいても静かで、人のいる気配はまったくくない。

「何か出そうですね」

沙耶がふと呟いた。

「え、まあこんな状況だからな」

俺たちはちよつとずつ先へ進んでいく。と、米屋を通り過ぎた先

には小道が続いていた。小道またいでちょうど反対にはバス停がある。なんでこんなところに？不思議に思っただけ近づいてみると、それはますます不気味なものだった。

「なんだ、あれは？」

「わ、わかりませんよあ」

沙耶は俺の後ろに隠れてしまった。もっとバス停に近寄るとそれが見えなくなり分かった。血だ！俺はそう思った。バス停の看板に人間の血液と思われるものが、べっとりとついていて。それはまるで何かを示しているかのように。そしてそれに続く何かが、小道に点々と示されている。血痕が道の真ん中に奥まであった。

「不気味ですね」

「ああ、でもいったい誰の……」

その跡を調べることにした。ここには綾乃はいないようだ。どこまでいったんだ。もしかするとこの先へ進んだのかもしれない。あの血痕が綾乃じゃあなければいいが……俺はそのことだけを心配しながら沙耶とともに小道に入った。

「大丈夫か？」

沙耶に声をかける。

「はい……」

沙耶は小さな声で返事をした。血痕のことが気になるのだろう。それはそうか。俺だってあんな血の量を見れば驚いてしまう。でもこの血痕の跡を追えば、何か分かるかもしれないんだ。俺はそう思っただけ、歩き続ける。しばらく歩いていくと、道が分かれていた。地面の真ん中には誰かが焚き火をした跡があった。やっぱりここは誰かいたんだ。俺はそう確信した。道は三つに分かれていて、正面の道は鉄の柵の扉で塞がれていた。真ん中に鎖が巻いてあり、南京錠で閉められている。何かで壊さないと進めそうにない。しかし、血痕はその柵の向こうへ続いていた。いったいどうなってるんだ？柵は錆び付いているがどこも壊れた形跡がない。

「どうですか？先輩？」

沙耶が俺の横で言った。

「そうだな。見ると血の跡はあの柵の向こうへ続いているんだが……」

「え、でもあの柵」

「そうなんだ。どこも壊れてない。人間が通り越せる高さでもないんだが、ましてや血を流した人間がな」

やはり不気味で不思議なことだらけの島だ。

「何か、あの柵の鍵を壊せるものを探そう。血の跡はあの先へ続いているし、道もある」

「でも……」

「大丈夫だよ、きっと」

沙耶が不安そうにしていたので、俺はそう言って励ました。まあ、自分もさつきから不安で始まらないのだが、こういう時こそ男を見せなければ。そんなことを思いながら焚き火跡のまわりを探し始めた。

しばらく探していると火掻き棒が見つかった。俺はそれで柵の鍵を叩き壊した。沙耶とともにさらに先へ進んでいく。血痕が長々続いている。途中、少し広い道端に廃車があったので何かないかと探ってみる。助手席に懐中電灯が置いてあった。それを手に取って確認する。少し光が点くまで遅いが、使えることには使える。それに夜には必需品だ。

その廃車があったすぐ近く、看板が立てられていた。たぶんこの先の何かの名前だと思うが、かすれていて読めなかった。左に道が続いている。しかし、その道の入り口は炎に包まれていた。近くに給油車があったので、そこから油が漏れ、誰かが火を点けた？ まるで俺たちを阻んでいるかのようなのだ。

「どうします？先輩」

「そうだなあ、火を消すものもないし。くそ、いったい綾乃はどこに……」

ここまで来ても見つからなかった。この先は炎に阻まれていけな

いはず。となるといったいどこに……

「綾乃さん、もしかするとアパートに戻ってるかもしれませんよ」
「そうか」

たしかに綾乃を探し始めてから一時間くらい立っている。だんだんと日も暮れ始めていた。綾乃もあきらめて帰ってるかも。そうして欲しい……わずかな期待を持ちながら、俺たちはいったんアパートに戻ることにした。

アパートに着く頃には、すっかり暗くなっていた。俺はさっき拾った懐中電灯を点ける。真っ直ぐ前を照らす光がなんとも不気味だった。俺たちはその光とともにアパートの階段を上がる。そして部屋に辿り着いた。思い切って俺は扉を開ける。

「綾乃？居るのか？」

返事が無い。やっぱり帰っていないのか。俺たちは部屋の中へ入る。

「綾乃さん……」

沙耶が俯いた。

「いくら助けを呼びに行ったって、そろそろ戻ってきてもいいはずなのに」

それとも綾乃の身に何かあったか？それは充分考えられる。無事で居てくれればいいが……

「沙耶、今日はもう寝ろ」

「え」

「明日、探そう……」

窓の外は真っ暗だった。俺は蛍光灯の電気確かめる。一応、使えるみたいだった。

「でも」

「今日はもう遅いし、外は真っ暗だろ？」

「はい」

俺は入り口は開けておくことにした。綾乃が戻って来るかも……期待はできないが。

「それじゃあ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

その後、俺は一晩中起きていようと思ったが、やはり睡魔には勝てなかった。

朝、か？

ふと目を覚ます。ここに来てから二日が続っている。今日は三日目だ。

「沙耶？」

と、はっと飛び起きる。沙耶がいない……

「おい、どこいったんだ？」

部屋を見回してもどこにもいなかった。綾乃に続いて沙耶までも……いいや。俺は首を振る。そんなこと……

今、実際に沙耶はいない。どこにも。ふと、テーブルを見る。手紙らしきモノが置かれていた。

『ごめんなさい』

紙にはその一言だけが書かれていた。

「なんだって？」

その紙をもう一度確かめた。そんな、沙耶までもどこかへ消えてしまった。

一人ぼっちの部屋を見渡す。今日も最悪の天気。雨が降っている。なんで！俺は自分を攻め立てる。二人が消えてしまったのだ。振り出しの一人になってしまった。やっと綾乃を沙耶を見つけたはずなのに、どうすればいいんだ？俺は苦悩した。答えがでない。ただあいつらを探し出す以外には……

服を整え、アパートを出る。外は晴天。昨日の大雨とは正反対だ。俺の心も三日前とはまったく違っていた。誰もいない。綾乃も沙耶も、義之も山梨も……

「ふう」

一息ついて、村の商店の方へ歩き出す。タバコ屋や食堂、米屋などは昨日よりはつきり見える。深い霧がないせいか。でもやっぱり人の姿はない村は、不気味なままだった。

歩き続ける。バス停の前までやってきた。かすかだが血の跡がうすれているように見えた。それでもまだ、跡は残っている。だが、小道の血痕はなくなっていた。なぜ？

小道へ入る。あいかわらず強い日差しが照りつけていた。二人ともどこへ行ってしまったのか？昨日、沙耶と来た道を探し回った。壊れた柵を越え、あの炎があつた場所へ行く。だが、炎は消えていた。誰かが水で消した？　ったく、昨日とは正反対の事ばかり起こるなあ……

「沙耶、綾乃、いったいどこいつちまっただ？」

炎を消してくれた何者かに感謝しつつも、その先へ進む事にした。先はけっこう曲がりくねっていて、細い道が続いている。この先にも別の村があるというのか？　俺

は歩く速度を速めた。と、道端に一人の男が立っていた。

「おい、あんた……」

俺はおもいきって声を掛ける。労働者のような格好をしたその男が振り返った。胸には名札が付いていた。名前は『小川』というらしい。

「う、お、おお、わたしの……」

何だこいつは？　俺はそいつの顔を見て、そう思った。両目を布のようなモノで縛られ、その布は男の血で赤く染まっていた。

「な、なんだ？」

俺は身を構えた……だが、そいつはうめくだけで、何もしてこなかった。

「ゆめ、の、おに、この村は……」

男がその先を話そうとしたが、力尽きたらしく道端にぐったりと倒れこんだ。

夢の鬼？なんだそりゃ？何か、この島の言い伝えか？それとも……
いったいどうしたってんだ？やっぱり何かおかしい。早くあいつら
を見つけ出して帰ろう。

しばらく進んで行くと、予想していたとおりにもう一つの村が見え
てきた。

と、不意にあの頭痛が俺を襲った。俺は倒れこむ。なんなんだちく
しょう。意識が薄れていった。

「おい、大丈夫か？」

誰かの声。でも誰だ？俺は目を覚ます。そこは畳の和風の部屋だ。
そして……山梨と義之？ああ、また夢か。いいかげんにしてくれ……

「おい、起きろ！」

俺はその声に反応し、上半身を起こす。あらためて周りを見る。
でも夢の中のホテルとは違っていた。古くて畳も少しはげていた。
そしてあたりが暗い。どうやらここは一軒家だ。

「良かった。目を覚まして」

山梨が声を掛ける。

「お前、気を失ってたんだ。道端でな。俺たちが見つけなかったら
どうなってたか」

隣で義之が言った。

「これは……夢、か？」

俺はまだ信じられない。昨日の夢のホテルとは違う。まるで現実
だ。

「夢かもな。この島はなんだか変だ。俺たち二人もここに昨日から
いたんだが、偶然外に出た時にお前が倒れていて、ここまで運ん
だのさ。でも、綾乃と沙耶はいつたどこに？」

山梨が言った。

「え、ああ、俺も探してたんだ。三日前までは二人と一緒に……」

「何？二人と一緒にだった？」

義之が詰め寄る。

「ちょ、ちょつと落ち着け……そうだったんだが、二人ともどこかへ消えちまったんだ」

「消えた？」

「ああ」

「杉並！お前何で二人と行動してたのに、なんでこんなこと……」
「またもや義之が詰め寄った。」

「ちょつとまで、俺にもわからないんだ。気を失ってたから」

「気を失ってた？それはどういうことだ」

「お前なあ……」

「義之！ちょつとまっててくれ！」

山梨が義之に言う。

「あ、すまん。つい……」

「で？」

「なんか、強い頭痛がするときがあるんだ。何回も。それに一回それで気を失ったとき、夢の中なんかでお前たち二人に会ったんだ」というか今は現実なのか？世界が夢の中とは全く違う。やはり現実か。

「それで」

「その夢が妙にリアルだった。でも今は現実」

「そうだな」

山梨が頷く。

「そういえば、俺が倒れてたあたりに、もうひとり男がいなかったか？」

「ん？ああ、あの変なやつだろう。目を布で何重にも巻かれて死んでた」

「夢の鬼ってなんだ？」

「夢の鬼？」

「ああ、そいつが言ってた」

「わからん。何かこの島と関係あるんじゃないのか？やはり言い伝えらしきものがあつたな」

まだわからない。俺にも突然の出来事だった。そういえばあの男、村がどうのこうのって言ったな……やっぱりこの島の奇妙な出来事と何か関係があるのか？未だに二人は見つからない。男三人が揃って、今度は綾乃と沙耶が……

「と、とにかく、今は早く二人を探そう」

俺は言った。今はそうした方がいいだろう。謎解きはその後だ。二人は頷いている。

「そうだ！沙耶どこにいったんだあ」

義之のやつ、夢と同じ反応だな。でも、早いとこ見つけなければ危険が迫ってるかもしれないからな。

「そうだな。何がいるかわからないから、気を付けて行こう」

山梨がそう言った。俺たち三人はまず役に立つものが無いかと、この家を探し回ることにした。

山梨と義之は一階を、俺は居間を出て、廊下の階段を上がる。二階は子供部屋や寝室、下宿部屋があった。誰かが泊まっていたのか？ここは民宿か？下宿部屋に入ろうとした時、それに気が付いた。ドアの端っこに小さなシミが付いている。赤い血のような……

「おい、杉並、ちよつときてくれ」

下で山梨が呼んでいた。俺は階段を降りる。後でもう一回、下宿部屋を調べてみるか。

「見てくれ」

山梨は居間の横の部屋にいた。そして祭壇らしきものを見ていた。そこには木でできた彫刻が飾られていた。白く塗られているものと赤く塗られているものがある。両方何かの動物だ。角が生えている。でもこれが何の動物かまではわからなかった。

「これ、なんだ？」

義之が丸テーブルに置かれていた手帳を開いた。俺たちもそれを覗き込む。

『私がここに来たのは三日前、今日も雨。私はこの島の奇妙なうわさを聞いた。それはこの島の……についてだ』

山梨が読み上げる。文字がかすれていた。一体何があるって言うんだ？

『……がこの島にいるらしい。しかし三日経った今でも……』

手帳の文字がそこで終わっていた。この手帳を書いたのはやつは何が言いたいんだ？と、山梨がそこまで読み終わったとき、玄関がガタガタと激しく揺れた。

「なんだ？」

俺たち三人は驚く。

「う、なんだ……」

突然、頭が絞めつけられた。またあの頭痛だ。俺は必死にこらえた。

「ちょっと見てくる」

山梨はそう言っただけで玄関へ。しばらくの沈黙。

扉を開ける音。そして……

「お、おい、あんた……」

山梨が絶句していた。

「どうした？」

俺たち二人が玄関に向かう。そこには死んだと思われたあの男が立っていた。姿は先ほどと変わらなく不気味だったが、何かに苦しんでいる様子だった。

「あんた、大丈夫かよ」

山梨が近寄ろうとした時、いきなり、山梨に襲い掛かった。

「何するんだ！」

俺は苦しんでいる山梨から男を引き離す。

「わ、私のせい、じゃ、な……やつが……」

男は低い声でそう言った。何言っただ？俺はそう思いつつ、向かってくる男に飛び掛った。男は地面に転がった。

「すまない」

俺はそう言っただけで早く起き上がる。そしてそばにあった木製の棒で、男の頭を強打した。男は痙攣し、そのまま動かなくなった。

いったいこいつは何なんだ？そう思い、すぐに家に駆け込んで、扉を閉めた。そうだ！山梨が……俺は居間に駆け込む。

「大丈夫か？」

俺は山梨に聞いた。

「ああ、大丈夫」

どうやら平気なようだ。

「それにしてもあいつは何なんだよ？」

義之がそう呟く。俺たちは畳に座って考えていた。あの男はここに来る前にも遭った。その時から様子がおかしかったことに間違いない。あの時は死んでなかったってことか？

「始めに沙耶たちを見つけよう」

義之が言う。

「そうだな。でも、二人を見つけるにはどうしたらいい？探すと言つてもどこを？」

山梨が答えた。

「それは……」

言葉が出なかった。たしかに無闇に探しても見つかるはずがない。何か当てがあれば別だが。

「それにまたあの変な男と遭ったらどうする？ここは村だ。まだいるかもしれない」

「たしかにそうだな。綾乃と沙耶も襲われて……」

「何だつて！おい、それはどういうことだ！」

義之が立ち上がって叫んだ。

「少し落ち着け。まだわからない」

義之を座らせた。

「山梨、何かいい考えはないか？」

「そうだな……」

山梨と俺は考えた。どうすればいいだろうか。義之はというと、まだ「沙耶あゝ」と言い続けていた。

「どうだ？何か思いついたか？」

しばらく経って山梨に声を掛けた。

「まずはこの家から手がかりになるようなものを探したほうがいいんじゃないか？下手にバラバラに行動して、村人と出会ってまずいだろ」

「そうか。でも、村人の中にもまだおかしくなっていないやつが居るかもしれないぞ」

山梨に言った。村人全員がおかしくなったわけじゃないかも思った。まだどこかにひっそり隠れてるかもしれない。綾乃と沙耶もそうしてくれているといいんだが……

「よし、じゃあ、この家で手がかりを探すやつと外に出て正気を失っていない村人を探すやつにわかれよう」

山梨が言った。

「そうだな。そっちの方がいいかもな」
頷く。

「はい！俺、俺、外を探索する！」
突然、義之が立ち上がった。お、義之のやつ、やる気まんまんだな。

「じゃあ、俺も義之と一緒に行こう。すまんが山梨、ここを頼んだぞ」

俺も外の探索へ行くことにした。

「わかった。気を付けろよ。それからじきに暗くなるからこれを」

そう言って山梨が渡したのは懐中電灯。ちよつと古臭いが使えることには使えた。

「じゃあ、行ってくる」

「ああ」

俺たち二人は山梨にそう言って家を出た。山梨には扉の鍵を掛けておくように言った。空は夕焼けに染まっている。

「よし、行こう」

「わかった」

俺たち二人は歩き出した。

「ふう、まいったな」

「どうするか」

俺たちは倉庫の中で雨がやむのを待った。今さつき出てきたばかりなのに、急に雨が強く降り出してきた。それにかすかな霧も出ている。

「今日は戻るか」

こんな天気の中探しても余計見つからない。

「い、いや、俺一人でも探すぞ！」

「落ち着け。第一こんな雨だぞ。それからもう暗い」

「懐中電灯があるだろ」

「あるといつてもだな、霧まで出てるんだぞ。前が見えなくなるぞ」と言った時にはだんだん霧が濃くなり始めた。

「く、しかたない。戻ろう」

「そうしたほうがいい」

俺たちはもと来た道に戻った。結局全然探せなかったな。探したといつても山梨がいる家の周辺やその先の炭鉱へ向かう道の手前までだった。幸い、この倉庫をさつき探したときに地図を手に入れた。これで数倍は探索がらくになるはずだ。やつのことで家の前に辿り着いた。

「山梨！俺だ、早く開けてくれ」

戸を叩く。

「ちよつとまつてろ」

家の中から山梨の声が聞こえ、やがて戸が開いた。

「大丈夫だったか。ずぶ濡れだな」

俺たち二人は大急ぎで中に入った。

「タオルを取ってくる」

そう言つて山梨は風呂場へ向かった。俺たちは玄関で顔や髪を拭いてあがった。まあ、ぬれた服はしょうがないだろ。

「どうだった？誰かいたか？」

居間に三人が揃い、それぞれの状況を報告した。

「この周辺を探したんだが、誰も見つかってない。運良く狂った村人には出会わなかったからな。だが、これを見つけたぞ」

俺は山梨の前に地図を出した。少し濡れてしまっているが、文字も読める。

「この島の地図じゃないか」

「ああ、そうだ。そういえば山梨の方はどうだった」

今度は俺の方が山梨に聞いた。

「すまないが何も見つかってない。しいていえばこの手帳だけだな」
そう言っ、あの文字がかすれていた手帳を取り出した。

「そうか。でも地図があるんだから、この辺だけじゃなく広範囲を
探せるぞ」

「そうしますか。今日もう寝よう」

「だな」

俺と山梨が二階の下宿部屋に行こうとしたとき、義之が前に立ち
ふさがった。

「お、おい、俺を置いてくなよ。俺も行くぞ」

「三人か。まあ寝れないこともないか。なにしろあまり広くないも
んでな」

山梨が言った。

「なんだよお前ら二人つきりになりたかったのか？」

義之がわざとらしく言う。

「そういうお前こそ一人で怖いんじゃないか？」

俺は義之に向かって言い返した。

「そ、そんなこと、あるわけ……あるんだよお、俺、ホント一人は
だめなんだよお」

義之が喚いた。

「わかった、わかった」

義之の以外な一面が見られた。

「ほら、二人ともその辺にして、行くぞ」

山梨の後に続いて、二階に下宿部屋に入る。あまり広くはないが布団もあるし、三人は寝れる広さだった。

「なんだ、寝れるじゃねえか」

義之が呟く。

「ふう、今日は疲れた。それになんだか頭もジンジンする」

俺は布団に入りながら山梨に言った。

「早く寝れば明日には直ってるさ。寝よう」

「ああ」

俺たち三人は眠りについた。

「先輩！先輩！しつかり！」

「ん？なんだ？」

ゆっくりと目を開ける。そこはあの夢の病院で、隣には沙耶がいた。なんだ、夢か。続きが見れるとはこんなにも珍しいことはないぞ。それにこの前は気を失って夢を見たからなあ、それもまた不思議だ。そして……

「先輩？大丈夫でしたか？」

沙耶が心配そうに声をかけた。

「ああ、なんとかな」

「そうですか。良かった」

沙耶はほっとした表情に戻った。

「そういえば綾乃は？」

「綾乃さんならさつき病室に行きましたよ。治療は成功しました」

「そうか。助かったのか」

「はい。無事に終わって良かったです」

俺たちは山梨と義之にも声をかけて、綾乃の病室に向かった。綾乃の病室は三階だったので階段を上がってすぐだった。まあ、エレ

ベーターもあるのだが。

「綾乃、大丈夫か？」

俺は綾乃にそう声をかけて、扉を開く。みんなも後から入った。杉並くん。それに、みんな……」

綾乃は疲れた様子だった。俺は体を起こそうとした綾乃を止めた。

「あ、そのままでもいいぞ」

「ごめんなさい、迷惑かけて」

「謝らなくてもいい。綾乃のせいじゃないだろ？それに綾乃らしくもないぞ」

「え？でも……」

綾乃は思ってたよりも症状がひどいようだ。今はそうでもないが。まあ、何にしる助かったのが一番だった。

「ふああ」

綾乃が大きな欠伸をした。

「なんだ？眠いのか？」

「なんだか疲れちゃって」

まあ治療が終わったすぐ後だから、そりゃ疲れるか。

「じゃあ、また明日来るよ」

「え？もう行っちゃうの？」

「ああ、それじゃあ早く寝るよ？」

「うん」

俺たち四人は綾乃の病室を出た。何にしる全員無事で良かった。

その夜、ホテルで夕食をとったあと、それぞれの部屋に向かった。

「沙耶は一人で大丈夫だった？」

「え、ああ、そう言ってたぞ」

俺は山梨に聞いた。

「なんなら俺と一緒に……」

義之が突然変なことを言い出した。いや、それはいろいろとまずくないか？

「今日はもう寝るか。明日綾乃の病院に行くんだろ」

「ああ、そうだな」

俺たち二人は布団を用意した。

「おい、義之、何やってるんだ？」

俺は何かに取り付かれたようにニヤニヤしている義之に言った。

義之が正気に戻って自分の布団を用意する。何考えてんだか？

「それじゃあ、おやすみ」

と言つて電気を消そうとした時。

「きゃー」

沙耶の悲鳴だ。

「ん？沙耶のやつゴキブリでも見たのか？」

「いや、どうかな。おい、義ゆ……」

寝てる。それも熟睡。もう寝たのか？お前の妹に何かあったかもしれないんだぞ。しかたない。

「ちよつと見てくるよ」

そう言つて俺は隣の403号室へ。

「沙耶？おい、何があった？」

と、勢いよく扉が開いた。

「あ、す、杉並さん！大変です。綾乃さ、綾乃さんが……」

何を慌ててるんだ？

「綾乃がどうかしたのか？第一あいつは病院だろ」

「で、でも、とにかく来てください」

「なんだなんだ」

俺は困惑しながら、沙耶に強引に手を引かれた。

「これ……え？」

「どうした？」

普通の和室だ。俺たちの部屋と変わらない。何かあったとは思えない。

「そんな……」

「だから何があったんだ？まさかゴキブリだとか言わないよな」

「そんなこと言いません！綾乃さんが倒れてて、近くにこの手帳が」
「綾乃が？熱でもあるんじゃないのか？あいつが今動けるわけないだろ」

「い、いえ、確かに綾乃さんでした」

「じゃあ綾乃は何処行っただ？」

「それは、わかりません」

と、俺はその手帳を見る。

「本当かあ？じゃあこれがそこにあったと？」

「はい」

その手帳……どこかで見たような気がする。けど思い出せない。
手帳にはこう書かれていた。

『鬼・夢・伝』

これは何だ？「おに・ゆめ・でん？き・む・でん？」と読める。
なんだか知っているような知らないような不思議な感じた。

「とにかくホントなんです。信じてください」

「うゝん。まあ、信じるよ。この世の中、不思議なことだらけだからな。じゃあ山梨たちにも話すよ。一人で本当に大丈夫か？」

「綾乃さん、いったい何がしたかったんだろう？」

沙耶が悩んでいた。本当だとしたら、病院に連絡すべきだろう。

「おい、本当に一人で大丈夫か？またもし何かあったら……」

「わかってます」

「そうか」

俺はそう言つて沙耶の部屋を出ようとした。

ガシャンッ

何かが割れる音が入り口の方でした。俺と沙耶が廊下に飛び出した。数メートル先で誰かが倒れてる。そしてその倒れているところまでを血の跡が点々と続いていた。暗い廊下でさらに近づく。

「あ、綾……」

前編（後書き）

いかがでしょうか？

続きの方もぜひお読みください。

前編を読んでくれてありがとうございます。

後編（前書き）

後編です。

前編を読まれた方はぜひ最後までお楽しみください。
では、どうぞ……

後編

「綾乃！」

俺はその声とともに飛び起きた。え？夢、か……。でも最後のあれはなんだったんだ。綾乃が出てきて、それから……。い、いや、アレは夢だ。現実じゃない。絶対に生きてる。そう信じたかった。

「ふああゝ」

義之が目を覚ました。

「おはよっす」

「おう」

のんきなやつだな。俺の夢の中でもそうだったんだが。

「山梨、おい。起きろ」

「ん？ふああゝ」

義之と同じくらい大きな欠伸だな。

「おはようさん」

「ん？ああ」

山梨はまだ寝ぼけているようだった。普通なら俺が昨日、あんな夢を見て疲れているはずなのに、なぜか一番元気だ。それに夢の内容もはっきりと覚えている。

これも普通じゃないぞ。

「腹へったな」

義之が呟いた。

「そついえば俺も昨日から何も食ってない。冷蔵庫には何か入っていないのか？」

「まあ、あることにはあるが、でも少ないぞ。俺たちがここを見つけた時から使ってたからな」

山梨が言った。少なからうと何だろうと、俺は食べてない。なぜ今になっていきなり腹が減り

出したのかわからない。夢の中では、ホテルの飯を食ったんだが。

「お、パンとチーズ、それから酒？があったぞ」

「何でもいいから何かくれ」

義之が言った。

「ちよつとまつてろ。今、皿に分ける」

「ああ、たのむよ」

三人で軽く朝食をとったあと、探索の準備をし始めた。地図をテーブルの上に広げる。今、居

るところは集落から少しはずれた一軒屋。倉庫や物置の方が、家より多い。細長い道沿いに建て

られている。地図で言うところ一番下の所から左横に道が伸びていた。

この地図を見つけた倉庫の

近くだ。その道に入るとすぐにつり橋がある。その先は昔炭鉱があった場所だ。

先へ進まず一軒家から戻って見てみると、俺がここに来るまで探し回ったあの商店街や焚き火

跡の広場も載っていた。とりあえず探したところ、この二つの場所にはいなかった。とするとさらに先へ進むしかなさそうだ。拠点はこことして行動した方がいいだろう。

「さて、どうするか」

山梨が言った。

「とりあえず先へ進んで見ないか？わかる範囲で」

「そうだな」

「こ、このつり橋はだ、大丈夫なのか？」

義之が戸惑いながらも聞いてきた。

「ん？大丈夫って何が？」

「だ〜か〜ら〜、落ちないかってことだよ」

義之がさらに説明した。

「そうだったな。忘れてた」

山梨が言った。

「何を？」

「義之は高所恐怖症だ」

そうだったのか？まあ、そんな雰囲気は前から出てたんだが。

「まずはその橋を見てみないと分からないな」

山梨がそう言って立った。

「よし、行こう。義之、いつまで座ってんだ？」

俺は義之を立たせると、先に行った山梨の後に付いていった。外は相変わらず雨だった。

地図にあつたつり橋を山梨が見つけると、俺たちも後に続く。少し古めの橋だったが、落ちる

ことはないだろう。下からの高さは十五メートルくらいだったが、こう見てみるとけっこう高いもんだ。おまけに霧が出ていて視界が悪い。それに雨もさらに強くなってきた。

「早く渡っちまおうぜ」

「ああ、そうだな」

俺たちは急いで。いや、ここは誰かが先に行つて様子を覗うのがいいだろう。

「ちよつと待ってくれ。先に俺が渡つて様子を見る。あとから山梨を義之は来てくれ」

「そつか？大丈夫か？」

「そ、そうしてくれ……」

山梨は心配してくれたが、義之は高所恐怖所のため俺が先に行つてくれとのことだ。

前を確認しながらゆつくりと渡り出す。突然、ガタツつと橋が揺れた。何だ？

「おい、山梨おどかすなよ」

後ろを振り向いて言う。霧のせいで姿は見えない。

「何言ってる？何もしてないぞ？」

山梨から返事が返ってくる。

じゃあ義之か？あいつめ自分が怖いからって俺たちにまでそれをわけなくても。

そう思って前に振り向いた瞬間、あの時、俺たちが見た村人が……
「う、うわあああ！」

村人は俺に襲いかかってきた。俺は一瞬何が起こったのかわからなかった。義之と山梨の声を

聞いたような気がする。俺は体勢を崩し、下に落ちた。いったい何が起こったんだ？そして激しく地面に叩きつけられた。また一人ぼっちか……俺は薄れゆく意識の中でそう思った。

どのくらいの時間が経ったのだろう。俺は生きていた。あのつり橋から落ちて、奇跡的にも生

きていたのだ。運が良かったというか。しかし激しく体を打ち付けたことは間違いない。体中が痛んだ。くそ！いったいどうなっちゃんだ？俺は手を壁において、よろよろと立ち上がる。橋の下、今いるここは岩に囲まれている暗い空間だった。壁の横にちょうど、洞窟というのか炭鉱なのかわからないが、その入り口がぽっかりと開いていた。

この崖を上にあがるのは無理だ。しかたなくその洞窟が炭鉱かわからない。まあ、たぶん炭鉱だろう。そこに入る。ここからどこかへ行くとすれば、道はそこしかなかった。

「いったい、どこまで続いているんだ？」

足元に気を配りながら、奥へ進んでいった。暗く、重い霧囲気を漂わしている炭鉱は一人だと

心細い。道も複雑に曲がっていたりする。こんな時に綾乃か沙耶、それとも山梨と義之がいてくれればいいのだが……未だに綾乃と沙耶は行方不明、山梨と義之とは逸れてしまった。どうすればいい？俺は一人で考えていた。

「ん？」

ふと、足元にカツンと何かがあたって。下を見ると、ピッケル？作業用のモノらしい。それが落ちていた。やっぱりここは炭鉱なんだ。今となっては使われていない古い炭鉱。どこまで続いているのかはまったくわからないが。とりあえず足を進める。

「ふう」

一息付く。この辺で休憩しよう。座るところがないかと、あたりを見回した。

ドン！

その時、後ろで鈍い音が聞こえた。そして振り向く。炭鉱夫姿の男がピッケルを構えている。目のあたりを布で巻かれ、血が滴り落ちていた。こいつは？そう思った瞬間、男が襲い掛かった。躓きながらもそれをうまくぐり抜け、俺は走った。

男が後ろから追いかけて来る。武器もない俺は逃げるほかなかった。戦うわけにもいかない。

男はおぼつかない足取りで迫ってくる。幸いなことに追いかけてくるものの、追い付きはしなかった。

しばらくして後ろを振り向くと、男の足が止まっていた。何だ？追いかけてこない。奴はいったいどうしちゃったんだ？でも、諦めてくれたと考えれば……

そう思っ先へ進む。

どんとどんと歩いていくと出口らしきものが見えてきた。やっとの

ことで外に出られたのだ。長いような短いような感じだった。

また、一人になってしまった。このループはいつまで続くんだ？それとも永遠に遭ったり、逸れたりして抜け出せないってことはないよな。

山梨、なんでこんな島に……

外に出ると、あたりは緑で覆われていた。木や草で覆われている。さらに真っ直ぐ道があった。空は曇っていたが、雨は降ってない。

それにしてもここは何処だ？ポケットの中にしまって置いた地図を取り出そうとする。だが……。ない。しまって置いたはずの地図がなかった。

おいおい、ないじゃないか。崖から落ちた時に、どこかにいつちまったのか？

まいったな……。心ではそう思いつつも、足を進める。とりあえず道は続いているのでまっすぐ歩くことにした。

まっすぐ進んで行くと、広い場所に出る。焚き火跡？ということ
は……

ここはあの古い商店のある村のはずだった。沙耶と一緒に綾乃を探しに行った時の場所。たしか道が三つに分かれていて、前は正面の道を通ったつけ。ここに繋がってたんだ。あの時は確か血の跡をたどって、そのまままっすぐ進んだけど。とりあえずは戻ってこられたわけだ。でも、またここから一人で探さなければならぬ。

とりあえずアパートに行ってみよう。綾乃か沙耶が戻ってるかも少し休みたいし……

やっぱりつり橋から落ちた時の怪我は軽いものではなかった。奇跡的に動けたものの、歩き回ったので相当疲れてる。肉体的にも、精神的にも。今になって疲れと

か痛みとかいう感覚に気が付き始めた。

ゆっくりとした足取りで商店のある村へ進んでいく。村は依然と

して静かだった。奴らが潜んでいるのか？そういえば奴らはいったいどこにいるんだ？奴ら。狂ったあの奴らだ。たぶん村人だったであろうものなのだが。どこかに隠れているかもしれない。注意して行こう。

とりあえずは綾乃と沙耶を期待してアパートへ向かう。

アパートの四階。ドアの前。たぶん居ないと思う。というか居ないだろう。でも、入ってみよう。スツと入り口を開けようとしたその時……

ドカツ、ガンッ

鈍い音が部屋の中から聞こえた。おいおい、怪物でも居るのか？開けるのをやめて、そつとドアに耳をあてる。いきなり入るのもまずいだろう。いや、でも綾乃か沙耶が誰かに襲われた……というものもある。とりあえず、ドアは閉めておいて叫んだ。

「おい、誰かいるのか？」

……

返事が返ってこない。

「おい！」

もう一度叫んだ。

「け、けん、健二、か……」
声がした。

「誰だ？」

聞き返す。義之なのか？

「おい、何が……」

そう言いかけた時、扉が勢いよく開いた。

ガンッ

俺はよろける。

「おい！義之！」

飛び出してきた。いや、倒れ込んできたのは義之……全身血だらけだ。

「おい、何があつたん……」

部屋のなかに目を遣る。

「よ、し、ゆ、きい……」

そう言つたのは奴だ。奴が居た。狂つた人間。血まみれの包丁を持っていた。

「義之！」

彼をおぶさり、階段を駆け下りた。

「くそ！」

グウオオオオ

奇妙な叫び声を上げながら、奴が追いかけて来る。急がなければ追いつかれる。俺は疲れていることも忘れ、走った。とにかく逃げるんだ。東の方向へ向かった。石段を降りて、倉庫の中へ。義之を外から見えない所に降ろし、その隣で壁によりかかつて息をこらした。

ザ、ザ、ザ、ザッといった音が聞こえてきた。奴が追ってきたんだ。どうかここがばれませんかように……神様。と思わず神に祈っていた。

ザ、ザ、ザ、

だんだんと遠くなってゆく……。なんとかやり過ごしたようだった。とりあえず外の様子を覗う。奴の姿はない。またもや危機が去っていった。洞窟の中でも途中で追いかけてこなかったし。ってこんなことを考えてる場合ではなかった。義之が大変だ。

「おい、おい」

声を上げて言う。義之の反応はない。ちきしょう！どうすればいいんだ？義之がこんなことに。他のみんなはどこにいるんだ！焦っている。自分でもわかっていた。でも、本当に……

「う……」

くそ！あの頭痛だ。突然襲って来た。頭を抱える。キリキリと絞めつけるような痛み。やはり俺の頭は耐え切れずに気を失った。

「は！」

突然目を覚ます。痛みが治まってきた。

「おい、よしゆ……」

隣にいるはずだった……が、義之はどこにもいなかった。倉庫の中には見当たらない。そんな、あの怪我じゃ動けないはずだ。義之は何処かへ消えたのだ。そう思っただけで起き上がる。周りを見ると、引き摺られたような跡が残っていた。血がかすれていて、外まで続いている。誰かにさらわれた……もしや、奴らに連れて行かれたのか？い、いやでも俺はここにいるし、もしそうだったら気がつかないはずがない。とりあえずはこの跡をたどってみよう。義之が何処にいるのか？みんなの手がかりも掴めるかもしれない……

倉庫から出て、血の跡が続く方へ歩き出す。港の方にそれは続いていた。

血の跡を辿って行く。港沿いの道へ出て、ゆっくりと血の跡が途切れるまで追っていった。やがて到着したのは砂浜。血の跡がここで砂に混じって掻き消されている。海の方を向いた。誰かが水に浸りながら倒れていた。あれは……義之だ！

急いで駆け寄る。

「おい、おい、義之！目を覚ませ！」

必死になって叫んだ。だが、彼の体は冷たく、ぐったりとしてい

た。それから何度も声を掛けてみたりしたが、まったく動く気配はなかった。

……

……

そんな……義之、嘘だろ？、おい！

「おい、たのむから……」

これは何の悪夢だよ……誰か、答えてくれ……俺は義之を抱えた。
「沙耶に何て言えばいいんだ……」

義之の返事はもちろんない。

「おい、俺はこれからどうすれば……」

……

……

あまりにも突然で、あまりにも納得がいかない。しばらくの間その場に座り込んで、悲しみと悔しさを胸に溜め込んでいた。普段はあまり泣かない俺だったが、この時ばかりは涙を抑えられなかった。

それから数分後、義之をおぶって港のほうへ歩き始める。こんな時、山梨がいてくれたら良かった。義之が奴らに殺されて、俺一人じゃどうしようもない。とりあえずは義之をどうするかだ。倉庫へ戻ろう。

義之を横たわらせて、俺も隣に座る。

「なあ、義之……」

……

答えるはずもない。俺も自然と言葉を失う。

「そつ、だよな。お前は、もう……」

……

「義之、すまない。助けられなくて……」

ふと前に山梨と三人で寝た日を思い出す。状況ははつきり言うて良くなかった。綾乃と沙耶が行方不明になり、おかしな奴らはうるついている。でも、三人、そう……三人でお互いを励ましあったから、乗り越えられたのに……今、俺は一人。山梨とはつり橋が落下した事故以来、行方がわからない。きつとあいつも俺たちを探してるのかもしれない。もしくは山梨も……い、いや大丈夫だ！そんなことがあつてたまるか！

あいつは生きてる……そう思ったかった。それから綾乃と沙耶。あの二人も未だに手がかりすら掴めていない。どこで何をしているのか？早く二人にも会いたかった。

それから……もう一つ、思い出したことがある。島に来たあの日、絶対全員で脱出するって決めたのに……それはかなわなかった。

「俺も寝るよ……」

倉庫の扉を閉めて、寝る体勢になる。体はヘトヘトだ。疲れも相当たまっている。島に来てずいぶん経つけど、疲れはやはりとれなかった。寝る時もおかしな夢のせいであまりすっきりはしない。悪夢はもう充分だ。何も起こらないでくれ……そう思っただけに落ちた。

ん？ここは？身に覚えのない場所だ。そうか、夢か……時々俺は夢を見る。それはあまりにも不可思議な夢。夢の中では自分の意識があり、自由に行動できる。今、居るのは夢の中だとわかる。また夢を見て起きる。それが普通なのだが、この夢はいつも続きから始まるのだ。そして、夢から覚めても忘れることはない。今も覚えている。この夢はいつたいたんだろう……

とにかく今日も夢の世界にいるようだった。

ここは病院？だとしたら随分古い病院だ。所々錆付いている。その病院の廊下に立っていた。静かすぎる。誰一人としていない。周

りもうつす暗かった。なんとか前は見えるもののなんとなく不気味だ。とりあえず進もう。

ゆっくりと前へ進んでいく。コツコツと自分の足音だけが廊下に響いた。まるでホラーアドベンチャーゲームの世界に迷い込んだみたいだ。一人で、考えて進んでいく。まさにその通りの状況だ。

カコンッ

後ろで音がした。ビクツとする。振り向くと懐中電灯が転がっていた。何かの拍子で柵から落ちたらしい。それを拾い上げる。何かの拍子に？でも、ここにいるのは俺だけ。地震も起きてない。ということは……

チリン……チリン……

何だ？今の音。鈴の音みたいな感じた。懐中電灯が点くのを確かめて、廊下の先を照らす。誰か居る！今まで気が付かなかったが、誰かが立っていた。

「だ、誰だ！」

「……」

相手は答えない。

「おい」

と言って、そいつに近づいた。

声に反応するかのようにそいつが振り向いた。

「お、鬼……」

言葉に詰まる。そこにいたのは人ではない。白い衣装に身を包んだ鬼だった。体は人間のようだが、顔は人間ではない。昔話によく出てくるような鬼だった。

『勇士よ』

「え？」

『我に変わり、光届かぬ地の幻夢を滅せよ』

「な、なんだ？」

カアアア……

その鬼が言葉を発すると、あたりが白くばやけ始めた。

「うお！」

俺は何がなんだかわからないまま、目を閉じた。

数時間が経過。

……

……

「グ、ゴホッ」

隣で声がした。目を覚ます。ここは……現実。夢から戻ってきたらしい。

俺は手に何かを感じた。見るといつの間にか刀らしきものを握っている。なんでこんなものが？その刀は柄の部分に何かが彫られている。動物？角が生えた動物が書いてあって、白く塗られている。

「グ……痛てえ」

え？俺はすぐに義之を見る。

「義之？」

彼は俺に寄りかかって言った。え？生き返った？おい、まさか！
「か、勝手に死なすなよ。ゴホッ」

「お前、生きてたのか！」

俺は信じられなかった。大量出血で、体も冷たかった。どう考え
ても助かる確率は低かった。

「そ、そんな顔すんなよ。グッ、生きてるぞ」

「本当か？」

「あ、ああ」

「ホントに本当なんだな」

「ゴホッ、そうだよ」

義之は生きていた。しっかりと話をしている。ホントに生きてるんだ。

「良かった……てっきり死んだのかと」

「ああ、一度は死んだのかな？」

「ん？おい、ということだよ」

「まあ、信じてくれるかは別としてだ」

義之がおぼえていることを話し始めた。

「まず、気を失った。その後はあまり覚えていないんだが、どこか遠くの世界にいたらしい。そこで不思議なことが起こった。目の前が白く染まって、気が付いたら現実に戻っていたってわけさ。隣にはお前が居たしな」

「なるほど」

「っていかお前のそれ、なんだ？」

義之が刀を指差した。

「俺にもわからないんだ。目が覚めたら握ってて」

「世の中は不思議な事だらけだからな」

「え？」

突然の声に外に目をやるとそこにはある人物が……

「山梨！」

「そのとおり」

「生きてたのか？」

山梨と再会したのだ。驚きの連発だった。

「ま、俺に死なれてはお前も大変だろう？」

「あたりまえだろう！」

また二人が帰ってきた。心強い味方が。

「義之も生きてたのか」

山梨が壁に寄りかかる義之に言う。

「なんだよ山梨、俺が生きてちやいけないのか？」

「いやいや、そういうわけではない。もちろん嬉しいぞ」

「山梨は義之と一緒にじゃなかったのか？」

そういえばつり橋から落ちた時以来に会ったのだが、その時二人は一緒だったはずだ。

「それがだな、俺たちは奴らに襲われて、そこでいつのまにか逸れてしまったわけだ。つまり、三人バラバラにな」

「そうだったのか……」

うなづく。そんなことが遭ったなんて思ってもいなかった。

「しかし、義之よりお前がよく生きてたもんだ」

「そっぴやそっぴや。つり橋から落ちたんだろ？」

義之も聞いてきた。

「なんとか助かったみたいなんだ。奇跡に近いよ」

「神のご加護というやつだな」

山梨がそう言って、俺の傍にあった刀を持つ。

「これも神のしわざか？」

「さあな？」

実際によくわからない。目が覚めた後に突然現れた刀。何かに関係が？　そっぴやえは夢の中に出てきたあの白い鬼。あいつは何だったんだろう。考えられるとすればその白い鬼が俺にこれを渡したとしか考えられない。でも、俺がこれを持って何を？　確かあいつ……何か言っただな、なんだったけ？　よく思い出せない……

「山梨の方こそ何かわからないのか？」

しばらくして山梨が何かをポケットから取り出す。

「これを見せてくれ」

山梨が持っていたのは手帳だった。所々破れて、汚れている。

「この島を訪れた探検家が残っていたものらしい」

「この手帳……」

義之が何かに気が付く。

「そうだ。覚えてるか？三人で村の家に泊まった時、同じ手帳を見つけただろ？たぶん何人かで一緒に来て、全員が同じ物をそれぞれ所持していた」

そう言つて裏を見せた。

『小川彰一（東部未開発島研究部・係長）』

「途中でこの手帳を見つけてな、この島に関する重要な手がかりが見つかった」

「なるほど。で？」

「まあ、まて。ここを読んでみる」

山梨が指差した欄は汚れていたが、なんとか読めそうだった。

『この島には昔からのいわれがある……二人の鬼についてだ』

『大昔、鬼たちはこの島の神の様な存在だと言われている。だがある時、一人の鬼が密かに地に降り立ったのが始まり……それから恐ろしいことが起こった。鬼はまず村人に自分の分身を取り付け、次々と襲つていった。鬼、人々を苦しめたその鬼は「食夢鬼」と呼ばれ、人々の夢の中に入り込み、人をコントロールする。鬼の配下になった者達は、食夢鬼に捧げる特別な存在の生贄を探し求めて、地を彷徨つ。これを止めようとしたのがもう一人の「生夢鬼」だ。彼は「食夢鬼」が地に降り立ってから数年間、戦ってきたが止める事ができなかった』

「なるほど。今の状況からしてこれは本当だな」

俺はそう確信していた。俺が見続けていたあの夢、そして夢の中に出てきた白い鬼……たぶんあれは「生夢鬼」。奴が言っていた言葉……くそ！思い出せない！

「お、おい、まだ続きがあるぞ？」

義之がページを捲る。

「そう、実はこんなことも書かれていた」

『八月二十五日、今日は寝てる間に夢を見た。食夢鬼に襲われたのではない。』

はつきりとは覚えてないが、白い鬼が出てきた。奴は俺に向かってこう言った。

「幻夢を……」その言葉に誓い、探索を進めた』

「そうか！」

思わず叫んでしまう。

「いったい何がそうなんだよ？」

義之に言われ答える。

「幻夢を滅せよ」

思い出した。

「幻夢を滅せよ？」

山梨が聞く。

「ああ、そうだよ！これだ！夢に出てきた！この話と同じ白い鬼が」
「本当か？」

「ああ、本当だ。ということは、小川って奴も会ったんだ！この鬼に」

「なるほどな。杉並も同じ夢を」

山梨が腕を組む。

「とにかくその食夢鬼ってやつを倒せばいいんじゃないか？」

義之が言った。

「そういうことか！だから白い鬼……たぶん生夢鬼は幻夢を滅せよって言ったのか」

「だが、奴は何処に居る？」

「そうか……」

それがわからなければ倒しようがない。小川さんもそのくらいわ

かっただろう。

「夢の場所にいけば手がかりがあるかもしれないんじゃあ」
義之が呟いた。

「杉並、お前が夢で白い鬼に会ったのはどこだ？」

山梨が手帳のページをめくりながら言った。義之の言葉を聞いて何かを感じたらしい。

「えっと、確か病院だった」

……

「ほう、やはり」

「どうしたんだ？山梨？」

「ここだ」

手帳の中ほどのページに簡単に島の地図が書かれていた。あのつり橋の反対側に病院がある。そこは赤鉛筆で印がされていた。

「彼もここへ向かったに違いない」

山梨がそう言うって手帳をしまう。

「俺たちも行くのか？綾乃と沙耶はどうすんだよ！」

義之が立ち上がった。少しふらついていたが二人で支える。

「義之、奴らはもしかしたら二人を生贄にしようとしてるかもしれない……」

「その可能性はない。まずはこの病院へ行って確かめよう」
山梨が付け加える。

「そ、そうか……」

義之も納得し、三人でつり橋があつた村を目指すことに。刀を拾い上げる。俺はこの時思った。もしかするとつり橋から落ちて助かったのも、義之が助かったのも生夢鬼のおかげかもしれない……と。

階段を登って村に向かう。あいかわらず村は静かだった。そこから先へ進む。つり橋の前までやってきた。

「おい、変じゃないか？」

義之が突然言った。

「何が？」

「今までだと奴らに出会ってたろ？でも……」

「寝てるんじゃないか？」

「いや、それはない。奴らは生贄を探すまで働き続ける」

「え？ということは……」

「奴らが生贄を見つけたのかもしれない」

山梨がそう言った。

「おい、じゃあ……」

義之が嫌な予感を感じたらしい。俺も、山梨も同じだ。

「綾乃と沙耶があぶないかもしれない……」

俺たちはつり橋を急いで、でも慎重に渡りきった。

つり橋の反対に来るのは三人とも始めてだ。周りは木に囲まれていて視界が悪い。さらに霧まで出てきた。ますます視界が塞がれる。舗装された道が一つさらに奥へと続いていた。

「病院はこの先だ」

山梨が手帳の地図を開いて言った。

「行こう」

刀を取り出して、霧の中入っていった。二人が後から続く。

しばらくして建物が見えてきた。ついに到着したのだ。夢の中の病院にそっくりだった。所々錆付いている。外観は結構大きい病院だった。

「ここか……」

俺は入り口のドアノブに手をかける。

「杉並、早く行った方がよさそうだぞ」

山梨が言う。

「健二、行け！」

義之が言った。

「なんだ？」

振り返るとそこには驚くべき光景があった。霧が晴れていくのが分かる。まるで俺たちを待ち受けたかのように……

「き、きやがったか」

呟く。山梨と義之はそこら辺にあつた棒を手に持つ。周りを食夢鬼の配下たち囲まれていた。奴らがやって来た。いや、戻ってきたというのだろう。数があまりにも多い。どこに隠れていたのかというほどに……

「早く行け！」

義之が武器を構える。

「じゃあ、これを……」

と言つて刀を渡そうとすると山梨が止めた。

「それを食夢鬼の本体に使うんだ！お前が生夢鬼から受け取ったものだろう！」

「そ、そうか」

「それで奴を……」

山梨は無理やり俺を中に押し込む。

ガタンッ

扉が閉まつた。

「お、おい、山梨、義之！」

開けようとしたが、開かない。くそ！全員助かるには山梨と義之がやられる前に本体を倒すこと。時間に猶予はなかった。急がなければ。

「すまない、二人とも」

そう言い残して、食夢鬼を探し始める。

そう思ったものの、奴は本当にここにいるのだろうか？もしかしてこれは罠なんじゃないのか？いいや、そんなことあってたまるか！山梨と義之はどうなる！ここに奴がいることを信じて探すしかない。刀を構えて慎重に進む。やがてロビーの扉を開けると廊下に出た。扉の前の壁に棚がある。その上には懐中電灯が置かれていた。この廊下、夢と同じ。懐中電灯をつけて前を照らす。前方に人影が見えた。

こっちにフラフラと向かってきた。

「おい、あんたは……」

労働者のような格好をした男。目を布で巻かれ、血が滴り落ちている。名札が付いていた。

「小川……」

そう……あの手帳の小川さんだったのだ。だが、残念なことに奴らの仲間になってしまった。

「あんたは果たせなかったんだな」

聞こえるはずもなく、変わり果てた男は迫ってきた。手にはナイフを持っている。

「ごめん、小川さん」

そう言って刀を向ける。目の前まで近づいて、ナイフを振り上げた瞬間を狙った。

ズッ

彼の腹に刀を突き刺した。

シューウウウウ

その時、彼の体から青白いものが刃に吸い込まれていくのが分かった。そして引き抜く。自分でも驚くほど冷静だった。小川さんはその場に倒れる。今のが食夢鬼の分身か？ということは、これはや

つぱり奴を倒すためのもの。生夢鬼が俺に与えた力。その場を離れようとしたその時……

「グ、ゲホ」

彼が咳をして起き上がったのだ。

「え？」

「ゴホッ、き、君は？」

腹を抑えながら言った。生きてるのか？よく見ると腹の傷がいつの間にか消えている。この刀は食夢鬼を殺すためのもので、取り付かれた人を殺す刀ではないことがわかった。

「あんたと同じことをしようとしてた」

「私と？」

「ああ、食夢鬼を消滅させる」

「で、でもそれには……」

俺は小川さんに刀を見せた。

「これだろ？これで奴が殺せる」

「そ、それだ！な、なんで君が？」

「あんたと同じ夢を見て、生夢鬼から渡された。『幻夢を滅せよ』ってな」

「そ、それじゃあ、君も」

「ああ、そうだ」

小川さんはヨロヨロと立ち上がる。

「こ、この地下に奴の巣がある。そこへ行くんだ！」

「地下に？」

「そうだ。奴は生贄、確か女の子だった。それも二人。配下から受け取って、吸収するつもり……って君！」

俺は走り出していた。間違いない！綾乃と沙耶だ。

「地下へ行くのはこの先のエレベーターを使い！」

「わかった。必ずやってみせる！」

「たのんだぞ……」

小川さんの姿が遠ざかってゆく。急がなければ……俺は刀を強く

握った。

廊下先の扉を開けると小川さんの言ったとおりエレベーターホールがあった。これで地下へいくのか。ボタンを押してみる。ウィーンという音がして、ガチャッと扉が開く。周りが錆付いているのにエレベーターは稼動していた。間に合ってくれ！すばやくそれに乗り込んで地下へ向かった。

やがてエレベーターが止まった。地下に到着したのだ。扉が開く。目の前の光景はもはや病院ではなかった。かなり広く作られた地下室。こんなにも広い所が病院の中にあるなんて思えない。薬品が散らばっていた。以前は棚が並んでいたであろうが、すべてグシャグシャに潰されている。そして……

周り全体を赤い色の触手で覆われている。周りの壁も、天井も、あらゆる所でクネクネとその触手一本一本が奇妙に動いていた。ここが食夢鬼の巣なのか？だったら綾乃と沙耶がどこかにいるはずだ。この中を歩くのはちよつと遠慮したいものだが、早く二人を見つけないとならない。

中へ入って、奥へ進んだ。

その時、

「だ、だれ、か……」

声がかすかに聞こえた？

「おい！」

叫んでみる。懐中電灯で奥を照らした。綾乃と沙耶がいた。壁の触手に捕えられていて、身動きできない状態だった。

「綾乃！沙耶！」

急いで駆け寄る。

「す、杉並、君？」

「せ、先輩？」

二人は息苦しそうにしていた。

「今、助けるから」

二人にまとわりついている触手を刀で切って、解いた。

「あ、ありがとう」

「せ、先輩」

綾乃と沙耶がおもわず抱きつく。何よりもまだ食夢鬼に取り込まれずにすんだのが運が良かった。

「二人とも無事で良かった」

そう言って二人を立たせる。とにかく二人は見つけたけどまだやることは残っていた。食夢鬼を殺したわけじゃない。

「二人ともよく聞いてくれ。俺はこれから二人をさらった奴を倒しに……」

そこまで言いかけたとき、二人が俺の後ろを指差した。

「ん？どうした？」

「す、杉並くん、うし、後ろ！」

「せ、せんば……」

とつさに振り向く。そこにいたのは俺が探していたもの。人ではなかった。長い牙を持ち、角が二本。体からウネウネと触手が出ていた。そして何よりもその全てが血のように赤かった。右腕で大きな鉈を持っている。

グガアアアアアアア

耳を劈くような声でその鬼は鳴いた。鬼、目の前にいるこいつがすべての元凶。食夢鬼。鬼は鉈を振り回した。

「うわ！」

鉈は空を切ったが、俺は後ろへつんのめる。

「と、とにかく走れ！」

二人の手をとって全速力でエレベーターに向かった。食夢鬼が追

にかけて来る。急いで二人だけでも……

エレベーターまで辿り着き、扉が開いた。

「は、早く、杉並君！」

「せ、先輩！」

「俺は……奴をやらなきゃいけない」

「でも……」

「いいから行くんだ二人とも！」

俺は二人を中に入れて、扉を閉めた。

「あ、す、杉並く……」

ウィーンという音と共に上昇するエレベーター。なんとか二人を地下から脱出させることができた。頼むから逃げ延びてくれ！残った俺がすることは鬼を殺すことだけだ。

目の前まで迫った食夢鬼に刀を向ける。

グガアア

小さく吼えて、鉈を構えた。

「こいよ……」

鬼を挑発する。案の定鉈を大きく振り上げた。その隙を見る。

ザシュツ

「グ、くそ！」

先に足を斬られた。膝を付いて座り込む。隙を突いたのまではよかったが、鬼のほうがフェイントして俺の足を斬ったのだ。真つ二つにならなかったが、それでも傷は深かった。足を抑える。

グガアアアア

鬼はもう一度吼えて、鉈で切りかかろうとする。鬼は俺にはもう力が残ってないと思ってるようだ。

「甘いぜ！」

今度は鬼が鉈を振り下ろす前に刀を奴の腹へ突き刺した。

ググオオ、グオ

腹を思いつきり貫かれた鬼はもがいていた。が、しかしそれでも鉈を振り上げる。

「う、うそだろ……」

突き刺さっている刀は抜けなかった。

「くそ！」

ここまでか……俺は、殺される。

その時、刀が白い光を帯び始める。そしてだんだんと広がってゆ

く……

「こ、これは……」

カアアアッ

光に包まれた刀は鬼を吸い込んでいるように思えた。

『幻夢が消える……』

そう誰かが光の中で呟いた。

「お、お前、生夢鬼……」

カアアアアッ

光はさらに強まった。俺は目を思わず瞑ってしまふ。

光が治まったのに気が付くと目をつつすらと開ける。気が付くとそこは病院の長椅子の上。

「おい、気が付いたみたいだぜ！」

ん？誰の声だ？義之？

「お、本当だ」

あれは山梨……

「杉並くん、良かった……」

あ、綾乃？

「せ、先輩、心配したんですよ」

沙耶……

……

「みんな！」

目を覚ました。

「大丈夫だったか？」

山梨は俺の体を起こしてくれた。

「健二いゝ、心配させやがってえゝ」

義之が言う。

「お前らはどうなんだ？」

二人とも服は破けて、所々に傷はあるが、大丈夫そうだった。

「杉並君……ほ、本当に良かった」

綾乃が傍で涙ぐんでいた。

「先輩、あり、がと……」

その横で沙耶も泣いていた。

「ほら、掴まれ」

山梨が肩を貸してくれた。

「す、すまん」

外に出る。空は晴れ渡って、空気も澄んでいた。以前の霧やあの重々しい雰囲気はまったくくない。今、あるのは本当のこの島の病院だった。

「終わったんだな……」

病院を見てそう言った。

「ああ、そういうことだ」

山梨がうなづく。

「さあ、帰ろうぜ。義之！」

義之がそう言って歩き出す。

「うん、帰ろう、杉並君」

「先輩、帰りましょ」

俺は空を見上げて答える。

「そうだな。帰ろう……」

俺たちは港を目指して歩き続けた。義之が先頭を歩き、その後に綾乃と沙耶が続く。そして最後に山梨の肩を借りて俺が歩く。森を抜けると、そこは港町だった。あの薄気味悪い村は消えていた。この島に流れ着いた時、俺たちはすでに異世界に居たのかもしれない。でも今は違う。人々で賑わい、活気が溢れている。夢で見たホテルや街並みがこの島の本当の姿で、俺たちが来ようと思っていた島はここだった。島も町もそのすべてが、元に戻った。

島の漁師が運転する船の上で、俺たちは休んでいる。

「そっいえば山梨？」

「ん？」

「この島の名前はなんだったんだ？」

「今ごろになってどうしたんだ……」

「何て言うんだ？」

「聖島だ」

聖なる島。

「またの名を幻夢島」

幻の夢……

「そっか……」

なんだかすべてが終わってから今までの出来事が夢だったんじゃないかと、そう思った。

「おかえり〜！」

港で姉さんが待つていた。車に寄りかかって、こっちに手を振っている。急いで姉さんの元へ駆け寄った。

「ただいま、姉さん」

久しぶりに姉さんの顔を見た。

「おかえり、健二。どうだった？旅行」

「……」

少しの間考える。

「どうしたの？」

「今までにないくらいのともない旅行だったな」

本当に今までにない旅行だったと思う。いや、これからの人生でもないだろう。一生に一回の出来事。

「ともないって？」

「まあ、夢を見たってこと」

「え？夢？」

「まあね」

「で、どんな？」

「それは秘密」

「えゝ、教えてよ」

「秘密」

「……もう」

姉さんだったら信じてくれるかもしれないけど……でも、今は秘密にしておこう。

「さ、帰ろう、姉さん」

「そうね」

やっと家に帰れる。こんなにも嬉しいことはない。

数日後、朝の新聞にある記事が載っていた。

『探検家・小川彰一が三ヶ月前から行方不明だった島で発見された。彼はこの島に伝わる謎の真相を掴んだと言う。そして、一人の青年によって命を救われたと話していた。』

「ねえ、健二」

姉さんと二人で朝食を取っていた。

「何？」

「この新聞の探検家、見つかったんだ」

「ああ、その人。助かってよかったじゃん」

「でも、この命を救った子もすごいわよねえ」

「え？」

「だって、探検家を島から救い出すなんて、すごいと思うけど……」

「い、いや、それほどでも」

「なんであんなに照れるのよ？」

「別に、なんでもない」

こうして夏の日ば穏やかに過ぎて行った。

終
わ
り。
。

後編（後書き）

このお話はこれで終了です。いかがでしたか？

この作品『幻夢島』は僕が初めて最後まで書き上げた記念すべき第一作目です。色々と矛盾したり、辻褄が合わなかったりと思いますが、最後まで読んでくれてありがとうございます。これから小説を書いていこうと思うので、どうぞよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4383i/>

幻夢島

2010年10月8日15時45分発行